

目次

連載: アメリカの空に魅せられて (3) 選択と誇り (中村 拓磨)	1-2	連載: 日米大学比較 —個人的な体験— (1) (山田 澄生)	4-5
寄稿: コラボレーションの有効性 (渡辺 貴則)	2-3	寄稿: アメリカ横断ロードトリップ (原 健太郎)	5-6

連載: アメリカの空に魅せられて (3) 選択と誇り

Georgia Institute of Technology
中村 拓磨

連載最終回は「選択と誇り」というテーマで書きたい。過去2回はアメリカの大学院や航空宇宙工学の魅力について書いた。今回は、日本に残ろうか海外の大学院へ行こうか考えている読者に、僕が思う「誇りある判断」について読んでもらいたい。

苦勞の原因

大学院の最初の2年間は船井財団の奨学金に依り授業料と生活費のサポートをしていただいたが、2015年秋学期からは博士課程の学生をしつつRA(Research Assistant)として働いている。RAになってから少し生活が変わった。雇い主である教授からは雑用が降ってくるようになったし、自分の研究の他にスポンサーに対する成果も挙げないといけない。RAをすると授業料が全額免除になり、給料も月に\$2000ほどもらえる。米国大学院学生会の留学説明会などで「アメリカの博士課程はお金の心配をせずに生活できる」などと言うのはこのためだ。僕も登壇するたびに似たようなことを言っていた。ただ、「心配をせずに」というのは嘘だろう。僕の研究室には現在アメリカ人3人、留学生5人の博士過程の学生がいる。アメリカ人3人は全員RAとして雇われているが、留学生でRAをもらっているのは僕だけだ。その僕の予算も、小額の予算を足し合わせてなんとか一人分捻出しているといった感じだ。前学期のRA予算が出ると決まったのは支払い締切り2日前で本当に心配だらけであった。RAのもらえない留学生はTA(Teaching Assistant、教授に代わってラボの監督などをする)やGrader(宿題の採点係)を行うことで稼ぐか、最悪年間300万円以上の学費を自分で払い学校に通う事になる。TAやGraderはRAほど給料をもらえない上に、業績にならない仕事をする事になるので卒業も大抵の場合遅れる。さらに、夏はほとんどの授業がないのでTAやGraderには給料がでない。前回書いた様に、航空宇宙工学は

留学生には比較的辛い環境になっているが、そうでなくとも「心配をせずに」というのはやや無責任で、次回留学説明会に登壇する機会があればもう少し苦勞も伝える予定だ。

RAになってからは英語に関しても苦勞が増えた。スポンサーの人の案内やラボの外の人間との共同ミーティングなど気を遣って話さないといけない場面が増えたからだ。あと、インターンシップ先も探していて、いうならば英語で就活を行っているわけだ。常に「失礼な表現してないかな?」と考えながら英語を書いたり話したりすることになる。日常生活には困らない程度の英語力は身につけたが、やはりノンネイティブにこういう場面は辛い。

辛い時に少し、なぜ僕がこういった苦勞をしているのだろう、と考えた。僕は仏教徒ではないが「因果応報」のアイデアについてはおおよそ賛成だ。ものには全て原因があるわけだ。僕は自分が苦勞しているのはおおよそ全て自分の責任、あるいはおかげだと思ふ事になっている。今の自分の苦勞は全て自分の選択の結果である。アメリカの航空宇宙の世界に憧れ、アメリカで働くためにアメリカの大学院へ来た。日本の長時間労働のように、苦勞していることそのものを美化するわけではないが、安易な道に慣性で進まない選択は自分の誇りであり苦勞を乗り越える糧になっている。

逆境への選択

「選択」ということで少し昔の話をしたい。僕は病弱な子供だった。小学生の低学年は喘息の発作を起こしよく学校を休んだものだ。小学1年生の運動会の練習中に発作が出て倒れて入院し、運動会に出られずに泣いたことをよく覚えている。自分だけ学校に薬を持って行き、それを隠れて使うのがとても嫌だった。だから僕はよく走り、体も鍛えた。低学年のころは妹よりも遅く帰って来ていたマラソン大会は、小学校の6年生の時には学年1番で帰ってき

た。その10年後には1日に300km自転車で走れるようになり、自分の足で琵琶湖の空を飛んだ。仙台から実家の三重まで自転車で帰ったりもした。母や祖父母達は今でも「子供のころはあんなに弱かったのに丈夫になったねえ。」と言う。自分でいうのもアレだが子供の頃から勉強はとてもできたので、ひ弱な秀才キャラとして育つ選択肢もあったわけだ。しかし、逆境に挑み、授かったものだけを頼りに生きていけない自分の選択が僕の誇りである。

選択と誇り

あなたは何を誇りに思って生きていだろうか？もし生まれた家が裕福ならば、多くの指標であなたは恵まれているが金持ちの両親を誇りにして生きるのだろうか？もし子供のころから外国語の教育を受け、2,3ヶ国語話せるなら、多くの指標であなたは恵まれているが物心ついたときには既に身につけていた能力を自慢してその先も生きるのだろうか？

僕は恵まれた人間である。理解のある両親の元に生まれて、お金の心配をせずに大学では勉強や部活動に打ち込めた。そして僕は運もいい。人生の早い段階で、飛行機やロボットといった自分のこれからの人生を賭けてもいいものに出会えた。ならば、自分の恵まれた境遇や運の良さを誇りにして生きるのだろうか？

僕はそんなものを誇りにすることはできない。もしも僕に子供

ができて自分の人生を語るとき、学歴や履歴書に載っている賞状などを自慢するより、僕は自分が人生の節目節目で行ってきた選択の一つ一つを息子や娘に伝えたい。病弱な子供が自分の足で空を飛ぶことを目指したこと。なままた英語でアメリカの大学院にきたこと。目の前の一流企業よりも、外国人に門戸を開かないアメリカの航空宇宙工学を目指したこと。こういった選択は、鳥人間で日本一になったという結果やアメリカの一流大学の学位そのものよりも誇らしい。僕の人生は惰性じゃない。一つ一つの、苦勞と逆境に挑んだ選択の結晶だ。海外の大学院へ行くのもいいし、日本に残るのもいいと思う。僕は、その選択に誇りがある限り、その先の困難を乗り越えていけるのだと思っている。



中村 拓磨
ジョージア工科大学航空宇宙工学科
ブログ: <http://takumanakamura.net/>

寄稿: コラボレーションの有効性

University of Pennsylvania
渡辺 貴則

ご挨拶

皆さま、初めまして。ペンシルベニア大学、Perelman School of MedicineのRadiology Departmentでポスドクをしている、渡辺貴則と申します。今でこそメディカルスクールの研究室に在籍しますが、僕は元々工学部出身であり、去年の5月にアメリカのミシガン大学で電気工学の博士号を取得しました。僕はニューズレター「かけはし」を読むことで、博士課程中は皆様の記事に大変励まされました。

本記事では、博士号を取得したばかりの今だからこそ持てる新鮮な視点から、僕のミシガン大学での博士課程卒業までの過程を紹介させていただきます。また、僕が博士課程コースで崖っぷちだった時期に救ってくれた、精神医学と神経科学の研究グループとの「コラボレーション」について話したいと思います。当然、博士課程のプロセスは大学・学科・指導教員などの要素に強く影響されるので、今回の話は、数いる日本人留学生のうちの一人が感じた「データポイント」のひとつとして捉えていただければ幸いです。



Fig 1. ペンシルベニア大学のBen on the benchと呼ばれるベンチ。筆者は右側(左側はBenjamin Franklin氏である)

留学、そして博士課程進学への経路

僕は29年の人生のうち、22年間をミシガン州で過ごした「ミシガンっ子」であります。2歳の時にミシガンに引っ越し、13歳で日本に帰国するまでは、月曜から金曜までは現地の公立学校に通い、土曜日はデトロイト補習校で日本語を勉強する日々が続きました。子供時代をミシガンで過ごした影響は大きく、音楽・ファッションなどの趣味は現地校の友達の間で流行っていたものを好み、スポーツに関してはバスケットとアメフトが大好きで、見る側としては周りの人気が高かったミシガン大学スポーツチームのファンでした(当時現地校の友達グループと一緒にミシガン大学の試合観戦で盛り上がったのはいい思い出です)。13歳で日本に帰国した後、地元の公立中学を卒業し、名古屋インターナショナルスクールに入学、2004年に卒業して、自分にとって馴染みのあるミシガン州に戻ることを決意し、ミシガン大学で電気工学を専攻することにしました。

さて、この時僕がなぜ電気工学を専攻にしたかといえば、恥ずかしながら「昔から数学が得意だったし、将来就職にも困らなそうだから」という何とも味気ない理由でした。幸い、プログラミングクラスで感じた「パズル解き」感覚や、Electronicsのコースプロジェクトで自分なりの工夫・アイデアを練りこんでデザインできる「ものづくり」の過程に楽しみを覚え、電気工学という選択は大成功に思えました。しかし、授業でエンジニアリングの基礎を学ぶことの楽しさを覚えた反面、大学3年目の時に初めてインターン経験をしたときの勤務内容がひどく退屈に思え、物足りなさを感

しました。何よりも落胆したのは、その時の同僚、上司達の仕事に対する姿勢には余り熱意を感じることができず、このまま卒業して一般企業に就職するという選択肢に疑問を抱くようになりました。Bachelor's degreeでのキャリアに限界を感じた僕は、具体的な研究テーマは定まらないものの、「人や社会のためになる仕事」をしたいと考えるようになり、博士課程に進学することにしました。

指導教員選びと研究テーマの行き詰まり

幸い、ミシガン大学とコーネル大学から博士課程の合格通知もらった僕は、途中で精神的に苦しくなったときにサポートしてくれる環境・友人に囲まれたミシガン大学に入学することにしました。

博士課程において、アドバイザー(指導教員)選びは最も重要なプロセスのひとつであります。当然僕も、ミシガン大の大学院に進学を決意した時から入りたい研究ラボとアドバイザーは心に決めていました。僕が在籍していたプログラムの当時のシステムは、博士課程入学時点ではまだ正式なアドバイザーを決めるわけではなく、大学院1年目にCore course requirementsを終わらせ、Qualifying exam(通称Quals)という博士課程の適性試験を合格してようやく、正式なアドバイザー選びが始まります。それで僕はQualsを受け、合格し、希望する教授のもとを訪れました。しかし、一年目のGPAの結果が振るわなかった為、受け入れてもらうことが出来ませんでした。ちなみにこのシステムは3年前に見直され、今ではプログラムの始めからアドバイザーを決め、アドバイザーの署名がなければQualsを受けられなくなりました。

本命の教授に振られてしまった僕は、他の教授の研究ラボでオープニングがないか必死で調べ、自分の希望とは少し外れた研究テーマを受け持つ教授のもとでと働くことになりました。このアドバイザーの専門はMachine Learning(機械学習)というものであり、今でこそ「データサイエンス・ビッグデータ」などとメディアでよく取りあげられている分野ですが、当時は今ほど話題性はありませんでした。Machine learningを用いて、医療データ解析するというのが僕に与えられた研究課題で、自分にとってあまり聞いたことがない研究テーマを題材として博士課程に臨むことは大変危険な行為であり、いざ研究をはじめてからは、苦労の連続でした。2年半費やした結果、アウトプットできたものはConference paper一枚で、このペースは博士号取得には致命的であり、自分は完全に崖っぷちに立たされました。大学院入学当時、自分が描いていた「誰もやったことのないアイデアの実現」の難しさを痛感した時期でした。



Fig 2. ミシガン大学で苦楽を共に過ごした大切な仲間達。

コラボレーションの有効性

研究テーマに対する自分の姿勢を変える必要性を感じた僕は、主に精神医学と神経科学の専門家から積極的に意見を求めるようになりました。こうすることで、先方も共同著者として惜みない協力を与えてくれるようになり、ようやく僕の研究も軌道に乗り始めました。ネットワークが広がり、第一線で活躍している研究者からの助言は、医学の知識が浅かった僕に新しい視点と、研究に対する情熱を与えてくれました。

今振り返ると、博士課程中に試行錯誤を何度も繰り返す苦労した経験は功を奏し、多分野とのコラボレーションの有効性を痛切に感じるようになりました。回り道に感じたこともありましたが、こうして身につけた研究スタイルには確固たる自信が付き、これから出会うであろう様々な困難に対しても、自身を磨くチャンスと捉えることができる心のゆとりが持てるようになりました。お陰で、去年の5月に無事博士の学位を取得でき、現在に至ります。ここまでたどり着けたのは、教授・友達・家族といった多くの方々からのサポート、恵まれた環境、幸運の巡り合わせがあったからだと感謝しています。

最後に

「我慢できないものをこらえるから、価値があるんだ。トップクラスになるには、トップクラスの苦しみをなめなければならない」。大学院在学中に壁にぶつかったとき、漫画「エースをねらえ」で出てきたこのセリフを何度も心の中で復唱してきました。大学では、様々な研究分野の第一線で活躍する、それこそ「天才」としか思えない研究者達を日常的に見てきたので、自分が将来トップクラスの研究者になれるかどうかはかなりあやしいと感じています(トップを目指すよう心がけてはいますが…)。それでも、今では医学界との共同研究により、「人や社会の為になることをしたい」という当初の目標が明確になってきたことを実感し、充実した研究生活を送っています。

もし本記事が、現在留学を考えている方、もしくは留学中の方に、少しでも参考になれば幸いです。もし本記事で疑問に思ったこと、または不明確な点などがあれば、お気軽にご連絡ください。



Fig 3. 現在所属するペンシルベニア大学のラボのグループ写真(筆者は左端)

渡辺 貴則
ペンシルベニア大学 医学大学院 ポスドク研究員
Ph.D. University of Michigan
Takanori.Watanabe@uphs.upenn.edu

連載: 日米大学比較 —個人的な体験— (1)

このたび三回の連載のかたちで日本とアメリカの大学のことに
ついて、私のこれまでの個人的な体験をもとにして書かせていた
だくことになりました。このニュースレターの読者は、留学の可能
性を考えている大学生が多いものと想像します。私の経験が皆さ
んに少しでも役に立てば幸いです。

まず簡潔に私の経歴を書きます。1968年に東京に生まれ、東京
で育ちました。中学、高校のときは、英語に関してはThis is a pen.
から始めて、英語には特に縁がなく得意なわけでもなく、高校生に
なってもFEN(Far East Networkというラジオ局)を聴いてマドン
ナやブルース・スプリングスティーンの歌を暗記している友人を横
目に、サッカー部でボールを追いかけていました。ただ、高校1年
生位のときに微積分を介して数学と物理が関連していることに興
味をもち、友人と一緒にちょっと背伸びした微積分や物理の教科
書をかじったりしていました。そのなかに物理学者リチャード・フ
ァインマンによるカリフォルニア工科大学の学部1・2年生のための
講義をおこした教科書「ファインマン物理学」(岩波書店)がありま
した。第3巻の終わりの「最小作用の原理」という章を読んで、わ
からないながらも非常に興奮したのを覚えています。そこで私は
変分法という言葉を知り、30年経った今もって変分法を生業にし
つつ学習院大学理学部で数学(専門は微分幾何学)の教員をして
います。すこし大げさな言い方ですが、この高校時代での変分法
との出会いが私の一生を決めました。「ファインマン物理学」の背
表紙には、ファインマンの白黒の写真の下に、「マサチューセツ
工科大学(MIT)で学部を終了、プリンストンで博士号を取得」とあ
り、ミーハーな高校生の私は、「こういう大学はすごいところなんだ
ろうな」と思ったのを覚えています。

そして高校3年生のときに、高校の廊下で近衛プリンストン奨学
金の掲示を目にしました。この奨学金は、戦前プリンストン大学に
留学していた近衛文隆氏を記念して、プリンストン大学に留学を
希望する日本の高校生を支援するために設立されたものです。英
語ができないことをよそに「ファインマンのいたプリンストンにい
って勉強してみたい」という一途な思いだけで応募したところ、幸
いにもその第一期生として留学することになりました。いざ留学が
決まると知り合いが誰一人としていない米国に渡ることには心配も
ありましたが、巡ってきた運命はありがたく受け入れようと心を新
たにして1987年に成田空港に向いました。その後の人生をすこ
し早回しにすると、プリンストンでは数学を専攻し学部を卒業(91
年)、スタンフォード大で博士号(96年)をとり、MITで3年間、コ
ーネル大で2年それぞれ講師を務め、アラバマ州立大バーミングハ
ム校で助教授(テニユア・トラックとよばれる職位)を3年間、計17
年間在米したあとに日本にもどり、東北大に准教授として9年間勤
務、そして3年前に現在の職場に移りました。もちろん計画したわ
けでもないのですが、この30年間で、世の中にあるいろいろな種
類(日/米、私立/国立/州立、総合大学/理工系大学)の大学を渡り
歩いてきました。長くなってしまいましたが、これが「個人的な体
験」の背景です。

留学の「主結果」

大学院生のときの指導教官から「1時間の講演では主結果は必
ず最初の5分で提示すること」と教わったので(?)、遅まきながら
留学を通じて得た私の「主結果」を2つ、ここに記します。まず1つ
目は

You cannot imagine what you have not imagined.

です。これは私の友人の友人である小説家の言葉です。「想像した
こともないことを想像しようとしても無駄だよ」という感じでしょう
か。生きているからにはこれから起こることに対して、畏れとか恐
怖というものは各人がそれぞれにもっているものですが、実際に
人生で起こることは良いことも悪いことも予定調和的なところは
殆どありません。少なくとも私の経験ではそうでした。そして2つ目
は、日本の民話(雁供養/雁風呂)にでてくる

「くちばしに木片を啜えて海をわたり、疲れると
水面に降りてその木片の上で休息を取る」

という渡り鳥の思いを体感したことです。17年間の在米中には、も
ちろん心底孤独で疲弊したことが何度かありましたが、そんなとき
は掴まる木片がどこからか現れたものでした。目の前に果てしなく
広がる大海を前にしてこれから海を渡ろうとしている皆さんには、
あまり将来への不安によって自分を追いつめずに「この渡り鳥に
なったつもり」になって「飛べるところまで飛ぶ」ことを繰り返してほ
しいと思います。甚だ主観的な「主結果」で恐縮ですが、留学とい
う大きな環境の変化を自分にとって有利に取り込むためには、こ
のようなイメージまたは「心の向き」をもつことは大切なものでは
ないでしょうか。

今回はまとまりのないものになってしまいましたが、初回に本音
を言ってしまったので少し楽になりました。次回以降は、アメリカの
大学における「教育」と「研究」について日本との比較を交えて、も
うすこし具体的なお話をしたいと思います。

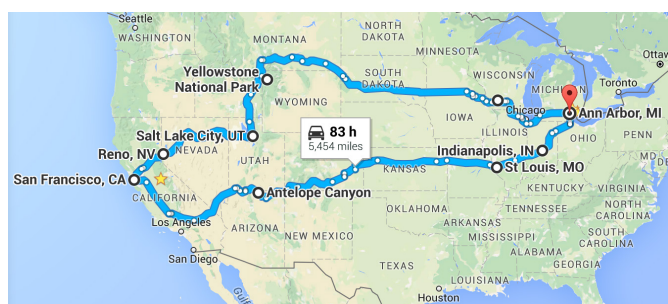


山田 澄生
学習院大学理学部数学科 教授
スタンフォード大学数学科博士課程卒業

寄稿: アメリカ横断ロードトリップ

アメリカ合衆国(以下、アメリカ)は、東海岸から西海岸まで約2500-3000マイル(約4000km)ほどある。これは例えば、東京からベトナムくらいの距離にあたる、たとえばアメリカの広さを実感しやすいかもしれない。これは、私が家族(妻と当時1歳の娘)をつれてミシガンからカリフォルニアまでロードトリップを行ったときの旅行記である。

2014年、カリフォルニア州のローレンスリバモア国立研究所にて、夏の間サマーインターンを行うことになった(前回の工藤くんの記事を参照にされたい)。移動のための交通費と引っ越し代を負担してくれる、かつ、交通費の手段としては車でも飛行機でも良いということだったので、ロードトリップを兼ねて車でカリフォルニアに向かうことにした。インターンは5月から8月だったので、行きは南、帰りは北のルートを通ることになった。



全行程の概略図: アナーバー(ミシガン)からサンフランシスコ(カリフォルニア)
Copyright: Google Maps

行きのルート

最初の行き先としては、ミシガンより南下して、オハイオ州・インディアナ州を通り、ミズーリ州のSt. Louis(セントルイス)に決めた。しかし、思わぬハプニングに見舞われる。娘が高熱・下痢になってしまった。ミシガンの医者に電話したところ、39度以上ある場合は1歳以下であればER(救急)に行った方がいいとのこと、夜中慌ててセントルイスの病院に行ったところ、入院することになってしまった。入院費がかなり気になったが、ミシガン大学の良い健康保険のおかげでほぼ全額カバーされた、のを知ったのは2ヶ月後。アメリカでロードトリップを行う・州外に出かける人は、健康保険のポリシーを確認されることをお勧めする。娘の風邪のような症状は、ミシガンを出発した時は涼しく気温も摂氏20度以下であったものの、南下するにつれて車内も暖かくなり脱水症所になってしまったことが原因と思われる。子供はロードトリップではこまめに水分をとるべし! 病院の治療と娘のがんばりのおかげで、1日で退院することが出来た。少し予定は変わってしまったし娘も本快復ではないが、旅は続けることに。

セントルイスから次の目的地は、コロラド州のDurangoにすることに。1000マイルほどのかなり長い行程はあるが、行けるだろうとの軽い気持ちで夜中の8時にセントルイスを出発。深夜ドライブをすることにした。3、4時間ずつ妻と運転を交代すれば車内で寝ることも出来るし、夜中であれば娘も車内で寝てくれるので楽だろうと思いロードトリップを再開した。この行程は一番チャレンジングだった。車が揺れるほどの強風が正面(ロッキー山脈の方)から

吹いてくる。高速道路を走っていて、電車はないのに踏切のようなものがある。途中で止まったガソリンスタンドで聞いたところ、踏切はトルネードが起こったときに、高速道路を通行止めにするためにあるとのこと。コロラドのColorado Springについては朝6時。そうすると今度は、Chase bank(銀行)からクレジットカードの詐欺の疑いがあるので一時的に止めたという電話がかかってきた。不正使用はなかったのだが、クレジットカードを盗んだ人が行うパターンとして、深夜にロードトリップをして逃げるといふものがあるらしく、深夜にガソリンを数回入れていたのが疑わしかったとのこと。地図上では近かったものの、コロラド州内はロッキー山脈を通るため、Durangoに着いたのはその夜6時頃。妻と私を合わせて、ほぼ丸一日運転していたことに。一日700マイル以上は無謀であることが分かった。娘も本調子ではなく、妻も私もくたくたに疲れてしまったため2泊することにした。今度はもう少し体調がよいときに訪れたいが、Durangoは避暑地避暑地、スキーリゾートとして良く、かわいいダウントウンがあり良い街だった。

ここからがある意味ロードトリップの本番であったが、残りの3、4日間で、Monument Valley, Antelope Canyon, Bryce Canyon National Park, Zion National Park, Las Vegasを訪れることにする。全て良かったが、特にBryce Canyonは壮大であった。写真参照。モニュメントバレーは、広い大地に不思議な形をした岩があるところ。アンテロープは、観光地としてはとても有名であるが、神秘的な洞窟の中に入っていく。きれいな場所だったのだが、残念だったのは原住民が運営しており入場料が高かったこと。一方のNational Parkはアメリカ政府管轄なので払っても比較的安い入場料しかとられない。ブライスは、見るところに行くまでハイキングをする必要がなく駐車場からおりてすぐに壮大な景色が見られるポイントが数カ所ある。子連れにはとても良い。キャンピングサイトも多くあるらしく、今度はキャンプで来てみたいものである。

ラスベガスからは砂漠を通して、カリフォルニアを北上してベイエリアに到着。ベイエリア付近の生活もとても楽しく、San Francisco, Sausalito, Napa, Monterey, San Jose, Yosemiteとまた今度違う機会に執筆してみたいと思う。

帰りのルート

エキサイティングな4ヶ月間もあっという間に経ち、8月末ミシガンに帰ることになった。今度は北のルートで帰ることを選択。Salt Lake Cityでモルモン教の教会を見て、そのまま東に行けばミシガンに最短で行けるのだが、北上してYellowstoneに向かう。途中Grand Teton National Parkに寄り道して、南の国立公園の砂漠と岩でゴつゴつした感じとは違い、湖もあり山もあり木々もある自然豊かな大自然。Yellowstoneは公園内部に3、4カ所主要な観光スポットがある。一番有名なのが間欠泉で、そこら中で湯気・煙がもくもくとしている。硫黄の匂いもして、地球が動いているというのを実感する。間欠泉が水しぶきを上げるタイミングも大自然が勝手に決めていることだが、どうもそれぞれの間欠泉にボランティアの

観察員がほぼ24時間態勢で張り付いているらしく、間欠泉噴出のタイミングを予想するウェブサイトもある。もちろん予想時刻通り噴出するものもあれば、不確実なものもあるので、数時間噴出を待つのは珍しいことではない。

さらに北へ行き、I-90という高速道路へ向かう。このルートは、個人的にはとても楽しかった。シアトルからシカゴまで通っている電車沿いに高速道路もあって、工業地帯が所々にあったりして昔のアメリカを見ているようだった。1930年代より無料の氷入りの水を提供するというので有名になったWall Drugが小さな観光地として楽しかった。南のルートではカンザス・アイオワと特に中西部と山脈地帯の間にはあまり面白い場所が多くなかったのとは対照的に、北ルートのサウスダコタは、自然と工業が両方あって面白かった。例えば、大統領の石像が山に彫られているMount Rushmore、奇妙な巨大な岩があるDevil's Tower、昔の地層が残っているBadlands National Park、街の中に川が流れており小さな滝になっているSioux Fallsなど。



一歳になる娘とMount Rushmoreで

Sioux Fallsより東はミネソタ州に入るのだが、ここからようやく中西部の景色に戻ってくる。中西部の景色と言えば、木々が多く牧場のようなところが多いという感じだろうか。いろんな大自然を見

た後に中西部に戻って来たときは、家に帰ってきたという安堵感と景色に変化がなくつまらないという両方の思いが混じっていた。最後にシカゴに寄る前に友人より勧められたウィスコンシン州にあるHouse on the Rockというからくり屋敷に寄る。忍者屋敷のように時には迷路のようになっていたり、中にエレクトリカルパレードのように光る人形たちがいたりして、アメリカでは珍しいアトラクションだった。Madison, Chicagoを通過した後、ミシガンのAnn Arborに戻って来て夏の楽しみが終わった。

終わりに

後日談ではあるが、アナーバーに戻って来て2ヶ月ほどはちょっと鬱っぽくなった。リバモアにいたときに4ヶ月生活して1時間しか雨が降らなかった、というほど常に晴れていた一方、ミシガンは雲が多く雨が降る日もしばしば。アメリカで働く・生活するのには、仕事という面だけではなく、場所による文化や環境というの大きな要因になるのだな、と痛感したサマーインターンの思い出である。

中西部ののんびりした感じ、山間部の大自然、そして西海岸の気候の良さ。一度は、皆さんも夏休みの間にロードトリップをされてみてはいかがでしょう？



原 健太郎
プリンストンプラズマ物理研究所
ミシガン大学博士課程卒業

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

石原 圭祐 高野 陽平 山田 亜紀
辻井 快 佐藤 拓磨 松島 和洋

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

ミシガンも本格的に冬を迎えて、気温が-20°近くに冷え込むようになってきました。この前はミシガンにいる日本人で鍋パーティを開き、久しぶりに日本を堪能しました。今期から本格的に研究をスタート出来る事になったので、寒さに負けず今期も頑張っていきたいと思います。(佐藤)

今月、無事博士号を取得する事ができ

ました。3月からはドイツのドレスデンでポスドクとして働くことになりました。近くにお立ち寄りの方は是非ご連絡ください。(石原)

今年カリフォルニアはエルニーニョの影響が例年にも増して雨が多いです。今まで干ばつだったカリフォルニアにとっては良いことですが自転車通学の僕にとっては迷惑な話、おかげさまで全然風邪

が治りません。編集部の他のメンバーも最近何人か風邪を引かれたようです。自分も含め体調管理をしっかりしなければいけません。とは言え、うちの研究室はボスから学部生まで一人を除き全員風邪。今後しばらくは苦しい戦いが予想されます。(辻井)

今年もニュースレターをよろしくお願ひします。(編集部一同)